（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	芦　宛雪
論文題目	The Evolution in Ownership and Business Practice in Thai Commercial Banking Sector since 2000s （2000年代以降のタイ商業銀行部門における所有構造と経営環境の変容）		

（論文内容の要旨）

本論文は、90年代末の金融危機から約20年のタイにおける金融システム改革の特徴と、それが商業銀行セクターにもたらした効果を分析したものである。分析の焦点は、2004年からはじまる「金融マスタープラン」を基礎とする各種の政策の中でも、特に海外資本の投資・参入に関わる規制の変容におかれ、商業銀行における所有構造の大きな変貌や競争環境の変遷を跡付け、その結果として銀行セクターの経営構造にいかなる変化が現れたかを検証して、金融システム改革の評価を試みている。

論文は7つの章で構成される。第1章は、タイの金融システムや規制制度の概要、2000年代以降の商業銀行の特徴を概観する序章である。

第2章と第3章は、2000年代からの金融規制の展開プロセスと銀行セクターの再編の推移を、文献や中央銀行等への聞き取り調査による一次情報から整理・検討している。第2章では、2000年代以降に政府が進めた金融システム改革の基調が、金融機関の経営効率改善、資本増強を通じた健全性の向上、外資を含む新規参入を通じた最新の金融技術の吸収と競争環境の強化などであったことが示される。そして、その結果としての金融セクターの再編は(1)多数の中小規模の商業銀行が外国銀行に買収される形での外資の参入が進み、(2)地場・外資の双方から小規模な商業銀行が多数設立され、(3)しかし一方で、伝統的な大規模銀行では、海外ファンドの出資を大きく受け入れつつも創業者家族の経営権は維持されて連携・拮抗の下で経営規模が拡大していく、という方向に帰結してきたことが、具体的に示される。第3章では、そのようなタイの金融セクター改革が、同じ時期の先行ASEAN諸国が向かった大きな方向の中に位置づけられることが論じられる。

第4章から第6章までの3つの章は、こうした商業銀行をめぐる所有構造の変化によって、商業銀行の経営構造にどのような変化が現れたかを、それぞれ異なった観点から明らかにしようとする論文である。第4章は、個別の銀行の株主情報と財務情報にもとづいて、銀行部門の再編が銀行業の競争環境と収益構造にどのような変化をもたらしたかを、記述統計的な観点から吟味している。その結果(1)銀行の収益構造そのものは、全体として伝統的な貸出業務からの変化は小さいこと、(2)金融当局は新規参入を積極的に推進したにもかかわらず、むしろ大規模銀行の市場集中度が高まり、競争環境は悪化し、大規模銀行の寡占的利益が高まってきたこと、などを見いだしている。

第5章は、長期の銀行ミクロ・パネルデータによる計量経済学的な実証によって、銀行セクターの変容を特徴づける外国資本や外国銀行のプレゼンス拡大が、銀行の経営構造にどのような影響を与えたかを吟味するものである。とりわけ外資の参入の効果を(a)市場全体に与える効果と個々の銀行に与える効果と、(b)外国銀行の参入（買収や新規設立）や地場銀行への外資ファンドの出資参加の効果とに、丁寧に峻別して分析していることが特徴である。分析の結果(1)市場レベルの外資の存在は、利子収入と非利子収入の双方の増加をもたらすとともに費用効率を改善して利益率の上昇をもたらしてきたこと、(2)個別銀行レベルの外資所有比率の上昇は、利子収入と貸倒損失の低下をもたらすものの、費用効率を悪化させていること、(3)外国銀行による現地の中小銀行の買収は、利子収入の緩やかな増加をもたらしたものの費用効率の改善は限定的で、結果として収益率が外資ファンドの出資を受けて規模を拡大した上位行よりも見劣りすることなどが、見いだされている。

第6章は、視点をケーススタディーに移し、上位行の一つであるカシコン銀行（Kasikornbank）のケースを取り上げ、家族経営企業の発展史の文脈も視野に入れながら、2000年代以降の外資受入による所有構造の変化が経営ガバナンスの構造と業績にいかなる変化をもたらしたかを吟味している。そこでは(1)所有構造面では創業者家族の持株比率は著しく低下した一方、海外のファンドや金融機関が主要株主として登場し、株式が安定的に保有されていること、(2)その一方で、経営体制の面では、創業者家族が依然として取締役会および経営幹部の役職を維持していること、(3)それ故に、海外株主は全体としての比重増加にもかかわらず、高度な経営の意思決定にはさほど影響を及ぼしておらず、創業者一族による経営支配が維持されていること、(4)それが企業の長期的、戦略的な意思決定の安定につながっている可能性があること、などが見いだされる。

第7章ではまとめとして以下の指摘がなされる。2000年代以降のタイの商業銀行部門では、地場資本の大規模銀行による強い寡占性と相互の競争、主にアジア系の外国銀行の参入による中堅銀行層の形成、さらに地場資本・外国銀行双方の参入による群小の銀行の登場という形で、新しい階層構造が形成された。他方で、伝統的な家族所有型の大規模銀行では、海外資本の参入は多面的な影響を及ぼしたものの、創業者家族の所有比率が低下したにもかかわらず、彼らの強いリーダーシップと経営体制が維持され、それがむしろ強い競争優位性をもたらした。その意味では、政府の金融改革が企図してきた競争環境の強化、金融技術の移転による技術進歩という政策意図は、そのまま明確な形で実現されたとは言い難い。これらの点が論文全体の主要な結論である。